

参考文献

- | | | |
|-----------|------|-------------|
| 文章心理学の新領域 | 創元社 | 安本 美典 |
| 文章心理学 | 新潮社 | 波多野完治 |
| 現代文章心理学 | 新潮社 | 波多野完治 |
| 統計2：標本調査法 | 培風館 | 西平 重喜 |
| 文章と文体 | 明治書院 | 講座現代語5 |
| 川端康成 | 角川書店 | 近代文学鑑賞講座十二卷 |
| その他 | | |

竹取翁歌と漢籍との

関係について

山 本 峯 子

まえがき

萬葉集卷十六の竹取翁に関する一連の歌に漢籍の影響が見られることは、既に先学諸家の指摘されている所でもあり、今更改めていうまでもない。この有由縁歌は、序文、長歌、及び反歌、並びに娘子等やうる九首の歌から成つてゐるが、この一連の作品と、漢籍、漢文学との関係について、改めて少しく検討を加えてみたいと思う。

一、序 文

序文が遊仙窟を背景に成立していることは、今日もはや疑いないことであるが、以下、先ず序文と遊仙窟との文章を列挙対照しながら論を進めていきたい。

(1) 忽値煮羹之九箇女子也。 (萬)

従来巡遶四辺。忽逢兩箇神仙。(遊)

これは、翁が偶然九人の美しい仙女に会つたということのだが、「忽値」「忽逢」等は、遊仙窟その他神仙物語等の漢籍によく用いられているようである。

所で、こゝで何故に九人の娘を出しているのであろうか。竹取翁の作者は、萬葉集評釈の窪田氏も述べられてゐる如く、神仙思想に於て貴ばれる九箇という数字を当てはめる事により、遊仙窟等に見られるような神仙的雰囲気を作り出そうとしたのではなからうか。更に、「九箇女子」「九箇」と「忽逢兩箇神仙」の「兩箇」については、従来未だ何の見解も出されていないようであるが、「九箇女子」とはいうまでもなく九人の女の子のことを表現しているものであり、従つて、「九人の女子」でもまた「九」だけでも差し支えないはずであるがこの場合、「九」や「九人」ではなくわざと「九箇」と書かれてゐるのは、やはり遊仙窟にある「兩箇」が作者の頭の中に働いて「九箇女子」となつたのではなからうか。

(2) 百嬌無俦花容無匹。(萬)

華容。婀娜。天上無侍。玉體透迤人間少。足……略……千嬌。百媚。造次無可比方。(遊)

この詞句は、九人の娘達の様子が花のように麗しい顔や姿であるということを比喻を用いて表現したものである。「百嬌」と「千媚百媚」、「無侍」と「天上無侍」、「花容」と「華容」、「無匹」と「少足」の如く兩者を比べても明らかないように、正しく遊仙窟の文章によつて綴られていることがわかる。

なお、特に内容に関係するというわけではないが、「無匹」の「匹」について、次のような異同があるので挙げる

萬葉考 花容無比〔無比今本無止と有〕

代匠記 花容無止 案止当作匹。

古義 花容無止 契沖云 止は匹の誤なるべし。

全註釈 花容無止 止は上の誤とする説があるが、止でも通ずる。もし誤とするなら、匹の誤とすべき

である。

である。以上を見ると「花容無止」と述べている全註釈の「止でも通ずる」とあるのは、代匠記のそれを参考にしての故ではなからうか。けれども「無止」について、契沖も「匹とすべきである」と注を付けているし、こゝの姿の美しい比喻表現としても「花容無匹」が適當ではなからうか。遊仙窟からの影響と見られている巻五、八五三の遊於

松浦河序にも、「花容無隻、光儀無匹」とあり、こゝはやはり「無匹」とした方が良いと思う。

(3) 千時

千時は、千時金臺、…千時硯在…、千時五嫂遂…等、遊仙窟にも多数の例があり、その他の漢籍にもしばしば見受けられる漢文的書き方である。

(4) 徐行(萬)

徐行歩歩香気散(遊)

「徐」は言うまでもなく「おもむろ」で、結局「徐行」とは「しずかに行く」という意味である。従つて本来なら「静行」でも差し支えないと思う。がこの場合、特に「静行」でなく「徐行」と書かれているのは、前記「九箇女子」の場合と同じく、これもやはり遊仙窟の本文が作者の頭の中にあつて働いていたからではなからうか。

(5) 非慮之外偶逢神仙。迷惑之心無敢所禁。(萬)

忽遇神仙不勝迷乱。…見面精神更迷惑心肝恰推、踊躍不能裁。(遊)

こゝは、竹取翁が九人の娘達と会い、娘達にいわれるまゝに羹の火を吹いていると、しばらくして娘達は、翁に対し冷淡な態度をとる。そこで翁は娘達に、「つい思いがけず、貴女方神仙に逢つたので心が迷つてしまい、慣々しくして申し訳がない。歌を作つてこの罪を贖いましょう」という所であるが、遊仙窟では、張文成が、「忽ち神仙に遇

つたので、精神が狂わんばかりで、情欲の起るのを押えることが出来ない」と云つている所とよく似ている。またその上に、「迷惑」「無敢所禁」の字句についても、「迷乱」「迷惑」等の類似字句が見られ、こゝもまた、遊仙窟の影響の下に書かれたといつて良い。

以上、類似詞句を挙げながら竹取翁歌の序文と遊仙窟とを比較してきたのであるが、その他、尚、構想の一部として次のようなことも挙げられる。

即ち、遊仙窟に

兩人俱起無。共勸下官、下官遂作而謝曰。滄海之中、難為水、霹靂之後、難為雲、不敢推辭、是為醜拙、遂起作舞、桂心陸陸然低頭而笑、……

とあるが、これは下官即ち張文成は、神仙達と遊ぶうち、主人役の十娘をはじめ、その他の仙女達の美しい舞を見せてもらい、次に勧められて舞を舞う。彼の舞は娘達のに比較するに勿論可笑しくて、見ているうちについて仙女の一人が笑い出してしまふ。そこで十娘は、仙女をたしなめ、何事を笑うかと尋ねると、婢桂心は答えて「妾等か能く声音を出すことを笑うのみ。」といつたので十娘は「何の能き処あるや」といつたのに対し桂心更に「若し夫れ能きにあらずんば何に因てか百獸率る舞ふや」と、これ暗に文成を笑つたのが十娘の詰問に遇ひ、頓に他に託して例を以て辯疏したのである。これを見た文成は笑て曰く、「百獸の

率の舞ふにあらず、云々」と、乃ち鳳凰に誘して舞ひしみを云う、此に於て皆、一時に大に笑うという所である。一方、竹取翁の序文には、

干時娘子等呼老翁嗤曰。升父来乎、吹此燭火也。……

……良久娘子等皆共含咲、相推讓之曰、阿誰呼此翁哉、

爾乃竹取翁謝之曰、非慮之外偶逢神仙、迷惑之心無敢所

禁、近狎之罪、希贖以歌、

とある。即ち張文成が下手な舞が笑われたにもかゝらず、続いてまた舞を舞うのは、丁度、竹取翁が娘達に醜い吹き方を笑われたにもかゝらず歌を詠んだという構想とよく似ているように思われる。

こうして考えてくると、この序文は、遊仙窟に於て張文成が神仙に会い、歌を歌い、舞を舞つたという動作や言動をもとに表現されたものではなからうか。また、前に掲げた詞句でも理解されるように、全体の感じとしては、勿論、この序文が、たとえば遊仙窟などのような神仙思想によつて物語られているといつて良いであらう。

二、長歌

縁子之 若子蚊見庭 垂乳為 母所懷

で始まつている長歌について、次に検討していきたい。

1 平生の釈訓

先ず「平生」の釈訓については、従来主だったものに、

たとえば、

古義 平生の字は、意得がてなるを、熟考るに、論語に、久要不忘平生之言とありて、孔安国註に、平生猶少時とあるに依りと見えたれば、少時を即這めぐる小児の意に取るものなり。

萬葉考 平生蚊見庭〔平生久老云生は子の誤にて這子也。〕

等のようなものがある。訓み方については、古義はじめ諸注釈いづれも「ハフコ」と訓み、その意味としては論語の孔安国註を引いて、「少時」即ち幼い時のことと解しているようである。長歌を見ると、こゝでは小さかつた頃の有様を追憶的に、具体的に振り返つて歌つていたのであるが、最初は「みどり子」で母に抱かれ、次は「平生」の身で小児の衣服を着せてもらい、次は少し成長して「童子」になるのである。このように見えてくると、「みどり子」と「童子」の間にある「平生」は仙覚の云うように「這う児」とするのが最も適當であるように思われる。もつとも、「平生」を「ハフコ」と訓む点については、まだ疑問の余地が残るようであるが。

尚、平生には、(1)ふだん、ひごろ、平常の意味と(2)其の昔、かつて、幼少の頃との二通りの意味がある。(ついでながら、「平生」の語は遊仙窟の中にも、十娘詠曰、平生好須鴛、……児与少府、平生未展と二箇所みえる。しか

し、この場合は、いづれも(1)の平常という意に解せられ、少時という意とは違つてゐる。)

次に萬葉集卷五にある吉田連宜の書状に、羈旅辺城、懐古旧而傷志、年矢不停、憶平生而落涙、とある。これは遠く都を離れた太宰府の地でありし昔を思うて心を痛め、年月留まらず、若き日を思うて落涙するという有様の事が書いてあり、こゝにみえる「平生」は明らかに(2)の幼少の頃を指している。

こうしてみると、「平生」と書いても幼時の頃を充分表現出来ることは間違いない。では、前掲萬葉考の「平生は平子の誤り」であるという説は如何であらうか。もちろんそれは「ハフコ」とするための訓み方である。がそれより論語註や宜書状も示す通り幼少の頃を表わす語としては、「平子」よりもやはり「平生」と書いて始めて年少の頃という表現が生きると思う。

所で、此の平生について、最近、橋本四郎氏は、「竹取物語の構成とその性格」の中で

平生は、古義が論語の孔安国註を引いて「少時」の意として以来、諸註釈全面的に従つてゐる。これについても、小島博士は、文選李善註などによる方がより合理的と思われるものの、そのまま原拠にもつてくることについては問題が残るとされる。……これについては、恐らく偶然に字面が一致したまでのことで、古義説にはその

一致の必然を裏付けるだけの積極的根拠がない。「平生」は漢籍と切り離して見るべきものと思う。

と述べておられる。しかし、「平生」を年少の頃と解する語としては、前記の孔安国註をはじめとして次の如く漢籍及びその他の例に見ることが出来る。

阮籍 詠懷詩 平生少年時、趙李相經過

陸機 歎逝賦 尋平生於響像 覽前物而懷之。

顏延之 秋胡詩 雖為五載別 相与味平生。

橋本氏は、平生を漢籍と切り離して見るべきだといつておられるが、以上述べてきた如く「平生」はやはり漢簿の影響のもとに書かれたと見て差し支えないと思う。

2 発想

竹取翁歌の発想として問題になるものに、「腰細」「美しさにみとれて鳥が来て鳴く」等がある。

(イ) 腰細

腰細は、美しい姿体の人に対する比喩として、漢籍にも昔からよく使用されている語である。

萬葉の

殿蓋丹 飛翔 為輕如来 腰細丹 取飭水
と歌っているのも、同じく作者の姿体が如何に美しいかということを表現したものであろう。

これについて、小島憲之氏は、「萬葉語の解釈と出典の問題」で次のように述べておられる。

「飛びかけるすがるの如き腰細にとりかざらひ、まそ鏡とりなめかけて……」の「腰細」の如きも、楚靈王が「細腰」の女を好んだので、宮女達が腰を細くする為、減食して終に餓死するものが出たという「細腰」の故事(荀子、君道)を下にふまえているものと思われ、これを下にもつて、始めて「腰細にとりかざらひ」が生きて来る―梁庚肩吾詠美人詩にも「非関能結束、本自細腰肢 鏡前難竝照、相将映涼池」云々

美人に対する比喩として、「腰細」が如何に重要な役目をもつていたが、こゝの文脈とも通じる点があるし、それは小島氏の指摘されている通りであろう。そしてこれは遊仙窟にも同様姿体の美しさを形容して用いられている。試みに拾つてみると

…頬上華開似鬪春、細腰偏愛軫、笑臉……

…紅衫窄褻小指臂、綠袂帖乳細纏腰……

等があり、いずれも美しい姿の表現には「細腰」が重要な役目を果しているようである。

また、竹取翁の歌には、服装描写について特徴が見られる。子供が成長し、一人前の青年になる頃、集中的に服装描写が歌われている。髪について、紫の大あやの着物、麻の手織物等の衣服について、加えて絹の帯、二あやのくつ下、黒ぐつ等々である。これらの服装描写も同じく姿体の美しさを表現する役目をいくらか果しているようである。

(四) 美しさにみとれて鳥が来て鳴く

春さりと野辺をめぐれば、面白み、我をおもえか、さぬつとり、来鳴きかげろう、秋さりと山辺をゆけば、なつかしと、我をおもえか、天雲も行きたなびきぬ。

の歌詞は、前半「春さりと野辺をめぐれば、……来鳴きかげろう」と後半「秋さりと山辺をゆけば……行きたなびきぬ」が互に対句を成している。このように「春」と「秋」とを並べて対句にするなど、先ずこの歌は多分に技巧的であるといえるようである。更に、自分の美しい姿をみて野辺の鳥が側によつて来て鳴き、空に浮んでいる雲もまた美しい姿に行きたなびくという発想、表現は、この時代にはあまりまだ見受けなかつたもののように思う。これは確かに漢文学の影響の下に詠まれたものと思うのである。小島憲之氏も前出「萬葉語の解釈と出典の問題」の中で、春さりのての詞句について、

美しい自分を見て鳥が来て鳴き、天雲も空にたなびくという趣向も漢詩的表現であつて、「羅衣河飄々輕裾隨風還……行徒用息鷄休者以忘餐」(曹子建、美女篇)「頭上倭隨髻耳中明月珠……行者見羅敷、下担擗髭鬚、少年見羅敷、脱帽著帳頭」(古樂府、陌上桑行)或は美声に關しての「声震林木、響遏行雲」(列子)や梁塵の故事(劉向別錄)も一聯のものである。こうした漢籍の諸例が作者の脳中にかげめぐつて、歌の表現となつたもので

あろう。

と述べておられる。

3 長歌の末尾

長歌の末尾の一節「……古部之 賢人藻 後之世之 堅監將為迹 老人矣 送為車 持還來」が孝子伝の原穀説話に準拠していることは、代匠記以来常識化しており、近くは、西野貞治氏の「竹取翁歌と孝子伝原穀説話」によつても詳しく論述されている。

所で代匠記には、「孝子伝」として

原穀者 不知何許人 祖年老 父母厭患之 意欲棄之 穀年十五 涕泣苦諫 父母不從乃作輿昇棄之 穀乃隨取輿婦 父謂之曰 爾焉用此凶具 穀乃曰後父老 不能更作得是以収之耳 父感悟愧懼 乃載祖婦 侍養更為純考が挙げられている。代匠記の原穀説話とこの末尾との關係として、西野氏は

(1) 賢人の賢字は、第一義として才能よりも善行乃至は徳行あるを表わす語であること、賢良、賢者等の用例から明らかであり、孝子を表わすのに、賢人を以つてしたのである。

(2) 送字は萬葉の中でも葬送を表わすのに同いられた「菟山中爾送置」(巻九、一八〇六)の如き例もあり、斯の用法は毛詩楚茨の「鼓鍾送尸」に先例を求め得よう。礼記月令の「出土午以送寒氣」の送字の注に「送猶畢」とあ

り、その疏に「如此云送猶畢者此時寒実未畢而言畢者、但意欲全畢耳」とあるによつても、送字は最後なることを意思しつゝする行為を表わす語であることは明らかで、棄字と略同様の意義にとり得る。

(3)車字については、古くは輿、輦も亦車であつて、車、輿、輦三者の区別が明らかになつたのは隋代のように、通典に引く統漢書百官志に見える車府令や、書紀に見える車持部、車持公の如きは、矢張り乗輿諸車を総称するに車字を以てした、吉い称呼にもとづくもので、原毅説話に見えるのも、漢土渡来の古い慣に従つて車と作つたものであらう……。

と述べられ、契沖の孝子伝原毅説話が、この長歌の末尾の典拠として、略妥当なものであると云われる。送車字等と内容の面から見て、この末尾が代匠記のいう孝子伝をもとに成立したことは疑いがないと思う。

むすび

以上、竹取翁歌について詞句、内容や発想の上から漢籍との関係を検討してきたのであるが、これにより、この作品には遊仙窟をはじめとする漢籍、漢文学の影響が少なからず見られることが理解された。そしてそれは単に詞句のみならず内容や発想の面に於ても興味ある事柄があり、時に或は釈訓の問題にも関係して来るように思われる。その外なお作者や筆者或は構成等についても研究すべきである

が、それは又後日にまつこととする。

書評

杉浦明平著

『戦国乱世の文学』

村中末吉

応仁の大乱から徳川初期にかけての戦国乱世の時代は、日本文学史の中では実りの少い暗黒時代とされている。すなわち、この時代には文学書として見るべきものが少いと一般には見られている。しかし、著者は既成の文学観をすてて、当時の作品を新しい観点から見直して、新しい階級である名主下人層や町衆の生活や思想や感情や希望に新しい人間形象、新しい文体や用語、新しい情緒がどのようにつぎされているかという点を基準にしている。そして粗野とか未熟とかまた非文学的作品といわれる当時の作品の中に、さまざまな文学的可能性の芽生えを探り当てようと試みているのである。

そうしてこの時代の作品の中において可能性の要素を見